首都圏の父親調査を読んで

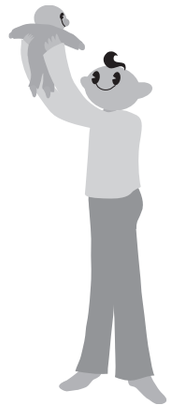
恵泉女学園大学大学院教授　**大日向雅美**

ようやく昨年になって父親が育児に参加する気運が高まり、「イクメン」ブームが起きています。育児休業を取得した男性の座談会をはじめ、父親の育児参加を取り上げた記事が新聞や雑誌に載る頻度がかつてに比べて格段に増えています。父親を対象とした育児用品も多種多彩なものが宣伝されており、父親が育児に携わることは今や日常的な現象となっているような印象も受けますが、実際のところはどうなのでしょうか。

05年の父親調査の経年比較として実施された今回の調査ですが、子育てに携わっている父親の実態は依然として厳しいように思われます。育児休業利用経験者は09年でわずか3.9%。平日の帰宅時間が21時以降と回答している父親が全体の４割を占めています。父親が「イクメン」となるための必須要件であるワークライフバランスはさほど進んでいない現実が調査結果に示されています。

実態がともなわないのに世の中がブームにわいていることが、父親を追いつめる原因であるように思います。子どもと一緒に過ごしている時間は「１～２時間未満」がもっとも多く、05年時点と比べて一向に増えていません。こうした現状に満足せず、子どもとの時間が十分にとれていないと自覚して、今以上に育児にかかわりたいとする回答が増えていることはブームのひとつの効果と思われます。他方で平日にかかわれない分、休日にその埋め合わせをしようとするように、「10時間～ほぼ１日」子どもと一緒に過ごしているという回答が半数を超えています。理想の父親のありかたに近づこうとする懸命な努力ぶりが印象的です。

父親が子どもとかかわる時間を増やしたいと願うのは、父親としての自覚のあらわれでしょうし、父子関係を確かなものとするうえで望ましいことです。しかしその結果、関心が子どもに集中して、夫婦関係や父親自身の社会的な活動が疎かになることが懸念されます。

たとえば妻との関係について、子どもを話題とする会話は多くても、互いの生活や仕事に関する悩みや相談の会話は十分に持たれていません。「自分は妻に必要とされている」という回答が05年時点よりも14.2ポイント低下していますが、心のきずなを結べるような深いコミュニケーションを交わしていないことも一因ではないかと考えられます。父親が夫として自信を失っているかたわらで、子どものことにしか関心を示さない夫に虚しい思いを抱いている妻の不満がうかがえます。また４割の父親が、地域に自分の居場所や相談相手（場所）がないと感じているのも考えさせられる結果です。父親が育児に熱心になるあまり、父子カプセル状態が増加するとすれば、母親が育児に専念して母子カプセル状態で孤軍奮闘を余儀なくされてきた従来の育児と変わりがありません。仕事や社会的活動に携わっている男性が育児にかかわることで、子育てがさらに地域や社会に開かれていくことを期待したいと思います。

仕事人間として生きることに力点をおいて、家族や地域に関心を示さなかったかつての男性に比べれば、本調査からみえる父親像は育児や家族に精一杯の関心を払おうと一歩を踏み出していることは確かです。その反面、就労体制の改善など社会の変化が不十分なままで、どこか不自然な無理を重ねているという印象がぬぐえないのも正直な感想です。「イクメン」がブームではなく日常の当たり前の現象となるように、ワークライフバランスの一層の推進とともに、夫婦が親として、夫婦として、人として向き合える家庭や地域のありかたを推進する必要性を強く考えさせられました。